

センター語録

4月から(財)京都市景観・まちづくりセンターの職員となりました。京都には学生時代から住んでいるので、もう10年以上になります。京都以外からやってきた学生は、就職は出身地へ戻るのが普通と思われそうですが、私のように京都に残る人も結構多いのではないのでしょうか。残る理由は人それぞれだと思いますが、私の場合は京都の暮らしが気に入っているからです。下宿も10年以上住んでいる人ばかりで、お互いみそ・しょう油・油を借り合い、作りすぎた総菜を分け合ったりしています。このような話を東京の友人にすると、まるで昔の生活をしているかのように思われますが、インターネットのADSL回線や衛星放送を利用し、情報には困りません。

東京に戻り友人と飲む機会があったのですが、2次会も予約するなど、

終電に遅れないようにスケジュールを立てていたのが印象的でした。しばらく京都で生活するうちに、自分に「終電」という感覚がなくなり、家に帰る理由は「銭湯に間に合わないから」となったことに気づかされました。生活の中での優先順位は都市や地域ごとに色合いが違うような気がします。

京都の暮らしでは、商店街、病院、銭湯など生活に必要なものは身近に大抵そろっています。河原町などまちなかにも自転車かバスで行くことができます。

11月15～17日には「まちなかを歩く日」というイベントが御池通・河原町通・四条通・堀川通に囲まれた地区で行われます。「歩いて暮らせる京都」をみなさんもぜひ実感してみませんか？

(景観・まちづくりセンター事務局 S・Y)



センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成14年度分)

平成14年度の賛助会員を募集しています。

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

[特典]

- ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・冊子等センター発行物の割引
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年会費]

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>

センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター

〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452

(元京都市立龍池小学校内1階南側)

TEL 075-212-4031
し えん さんかひとづくり (支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金(祝日を除く)の9:00～17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。

なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。



京まち工房



(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

地域と共生する土地利用から、パートナーシップのまちづくりへ



右京区・太秦で取り組んだ「まちなみ住宅」設計コンペ(都市居住推進研究会、センター共催。詳細はニュースレター14,15,16号参照)。地域の個性や魅力を踏まえた建売住宅の設計提案を、地域住民、購入意向者、開発事業者が審査し、学識経験者が運営をサポートするこれまでにないコンペを経て、最優秀賞に選ばれた「まちなみ住宅」(12区画)が平成14年4月に完成しました。

完成の際には、3つの立場の審査員と設計者、周辺にお住まいの方が参加する「見学会+まちづくり交流会」を開催し、これからのまちづくりをどう展開するか、活発な意見交換が展開されました。現在、対象地ではコンペを通じて形成され

た「顔の見える関係」を生かし、既存の町内と新しい町内が相談し合って、様々な取組を展開しています。また、事業者が整備した「インターネット町内会」を通じて、活発な情報交流が展開されているそうです。

センターでは「地域と共生する土地利用」の実現に向けた手法についても研究しています。この土地利用を実現することで、そこに住まう人がどのようにいきいきと安心して暮らすことができるのか。本地域で協働関係を構築しながら活発な取組が展開されていることから大きな可能性が感じられます。

本地域での安心していきいきと暮らせるためのまちづくりは、まだ始まったばかりです。今後のまちづくりが期待されます。

あなたのまちづくり拝見 京都・大原里づくり協会



大原ウォッチングの様子

農業と観光と生活の場、大原

「京都・大原里づくり協会」の活動拠点である大原は、京都市左京区の北部、比叡山の北西のふもとで高野川の上流域に位置しています。南北に広がる盆地で、平地には農地が広がり、寂光院や三千院をはじめ、名所旧跡が多くあり観光地としてもにぎわう地域です。

幹線道路の整備にともない、市街地へのアクセスが容易になり生活は便利になりましたが、その一方で、少子高齢化等による後継者不足等で休耕田が増えるなど大原の農村風景が失われてきています。

京都・大原里づくり協会の発足

大原では、平成11年から豊かな農地や山地で採れる幸を生かして毎週日曜日に朝市を開催しており、現在も観光客や市街地のサラリーマンだけでなく大原の住民同士が交流する場としてもにぎわっています。大原の良さを残していくには、農業だけでなく観光や生活環境など地域の全体的な課題を共に考えていける会をつくらうという案が出されたことが、「京都・大原里づくり協会」設立のきっかけとなりました。

平成12年12月、大原学区自治会の呼び掛けによって大原の里振興協会準備会が発足し、これからの取組の方向や考えていくべき課題について話し合いました。その話し合いを重ね、平成13年9月に「京都・大原里づくり協会」が発足しました。

地域全体で取り組むことを目指し、会の役員は、地域の各種団体の役員をされている方で構成され、それぞれの団体間の連携がはかられています。

身近な地域資源から将来を展望

「京都・大原里づくり協会」には、4つの部会があります。会として今後取り組んでいく方向を示す「里づくりプラン」策定委員会の「作業部会」と、具体的な地域課題について取り組む「農業部会」「観光部会」「生活環境部会」

住民主体の取組を様々な視点から紹介するこのコーナー。

今回は、地域全体の資源や課題を振り返り、将来を展望しつつ、農業や観光、生活環境などの課題を、地域全体に根ざした活動によって取り組む「京都・大原里づくり協会」を紹介します。

の3つです。

「里づくりプラン」の策定にあたって、月1回のワークショップで地域の資源や課題を振り返り、活発に話し合っています。まずは地域を見てみよう、大原ウォッチングにも取り組みました。「住み慣れたところだけでなく、新たな視点で見ると課題もたくさん見えてきました」と副理事長とプラン策定部会長を務める佐竹和男さんは話されます。「里づくりプラン」は平成15年3月をめでにまとめられ、地域の中だけでなく行政機関にも配布する計画となっています。

また、「大原を知る勉強会」として月2回程度の勉強会を開催し、自分達の住む地域にまつわる歴史を勉強しました。「大原では平安期に多くの歴史が形作られてきたことを再確認しました。建礼門院がこの地に隠れ住んだこと、比叡山の多くの高僧が修行の『場』(別所)として独自の世界を形成していたこと、さらに大原の地は戦いに敗れた公卿や武士などが身を隠す『場』でもあったことなどを学びました。まず大原の歴史を理解し、歴史に根ざしたまちづくりをしていきたい」と佐竹さん。

観光部会長の久保勝さんは「まずは地域の方に大原を知ってもらおうということが目的でした。東西に連なる山の上から大原盆地や琵琶湖が一望できる場所など、50年近く住んでいて初めて知ったこともありました。単に勉強しただけではなく人に伝えていこうと話し合い、観光ボラン



「里づくりプラン」の作成中

ティアをしていこうと話合っています。大原には史跡もたくさんありますし、語り部などもおられます。大原にあるいろいろな要素をうまく結びつけていきたい」と話されます。大原に点在する名所旧跡や豊かな自然をつなぐカントリーウォークの整備なども計画されています。

今後の活動について

「今後は、この組織をNPO法人にしようと思っています。活動が活発になるにつれて、責任も増えますし、人手不足の農家の草刈りや種まき作業を有償で行うなど、農家のニーズに農業部会として応えていきたいと考えて

います。そのためにも、信頼される存在になっていきたいと思っています」と事務局長と農業部会部会長を務める宮崎良三さん。

現在、会員数は約160人を超えました。「課題はたくさん見えてきましたが、今後も人の輪を広げながら、できるところから息長く取り組んでいこうと思っています」と佐竹さんは話されます。

* * *

互いの顔が見える関係を築き信頼を深めながら、地域全体の取組として活動している「京都・大原里づくり協会」。その活動の熟成とともに大原のまちの魅力が増していく様子が目に浮かびます。



京・大原里づくり協会 理事長 土井孝雄さん

「大原の里」は全体としてこれだけよいのか、将来はどんな姿がよいのかを住民自身で考え、理想像を実現したいと組織されたのが私達の「京都・大原里づくり協会」です。

まず最初に大原のマスタープラン策定に取り組んでいますが、農業・農地の問題、歴史的風土の観光地としての問題、又生活環境とくに下水道未整備による数々の課題等々問題が山積しています。

里の自然や環境を豊かにするため、会員一人ひとりに先ず「隗より始めよ」の気概を望んでいます。



京・大原里づくり協会 副理事長 佐竹和男さん

永年、景観やまちづくりの問題に関わってきたので、定年後は知識やノウハウを地域のために生かしたいと以前から考えていました。

大原は平安時代から隠棲の里としてまた、大原女の里のイメージがありますが、最近では都市化の波にさらされ、里の魅力が次第に薄れていくことを危惧しています。

協会設立には、大原の魅力を残そうと多くの方々のご支援をいただき感謝しました。1年が過ぎて当初に考えたことがなかなか進展しない苛立ちもありますが、先ずは活動の指針となるような「里づくりプラン」をつくり、関係方面に提案したいと思っています。



京・大原里づくり協会 常務理事事務局 宮崎良三さん

サラリーマン卒業後のライフワークにと、「京都・大原里づくり協会」に参画しています。

私の任務は、農業問題であり、地区の荒廃化が進んできた農地を守るためにはどうすればいいか。世相とも言える難題に頭を悩ませながら取り組んでいます。

大原の里は、美しい自然の中に田園風景とたたずまいが調和して、日本人の心のふる里とも言われています。

大原が、ずっと農村であることを維持し、農業と観光をジョイントさせた癒しの里として、訪れる人々にこよなく愛される里づくりが私の目標とするところです。

当センターにインターンシップの学生さんが来られました。4カ月の期間を終えての感想を語っていただきました。



立命館大学法学部 国際比較法専攻 山田 沙希さん

私は現在、立命館大学法学部国際比較法専攻の4回生です。平成13年12月から平成14年3月まで約4カ月間、センターでインターン実習生としてお世話になりました。実習内容は、センターの理事会・評議員会に向けて、各種規程の改正提案及び議案作り。

「...要、法律知識」それは分かっている応募したのですが、いざ実習内容を目の前にした時は、ただどう

しよう、の一言でした。結果的にはちゃんと作れたのですが、今度は作ってしまった事がなんだかおかしい感じがしています。

私はこの4カ月間の実習で二つのものを得ました。一つは、法律に対する偏見がなくなったこと。一つ一つ見てみると、どの法律も条例も規程も、きちんと根拠を持って理路整然と存在していました。今まで既製品でしかなかった法律も、誰かの手によって作られたものなのだ、という当たり前の事に気づいたのです。

そしてもう一つは自分が法学部生であるという自覚です。今まで法学部のくせに敬遠していた法律でしたが、いつの間にやら、自分があの法律的な言葉の言い回しになどにすっ

かり馴染んでいたことに気づいたのです。それは今までひたすら受身にまわっていた法律に、自ら取り組んだ結果だったのかもしれない。

実習内容も大学の中では経験できない、とても新鮮なものでしたし、それ以上に現場の空気を実感できたことが、大きかったのだと思います。この実習を通して世の中には色々な人がいて、一つの問題に対しても、色々なアプローチの方法が、そして仕事の種類があるのだと知りました。

インターンという経験はこういうちょっとした、けれどそう簡単にはできない視点転換のチャンスだと思います。私はそんな貴重な経験をすることができて、本当によかったと思っています。

お知恵拝借～

特定非営利活動法人 山口まちづくりセンター



活動の拠点・センターの前にて(左端:内山さん)

室町時代に時の守護・大内氏によりまちが形成された山口市(人口約14万人)は、京都と同様盆地に位置し、まちが縦横に区画され、緑豊かな一の坂川がまちの中央を流れています。

山口まちづくりセンターは、住まいやまちづくり、そして山口の良さを継承する活動を市民と共に取り組むことを目的に、平成10年に設立されました(平成12年に法人認証)。

会員は約70名で、建築・まちづくりに関わる専門家、市の職員、学生等多様な方で構成されています。センターは、空き家になった洋館を借りて、会員の手作業で改修し、拠点として利用しています。

活発な部会活動

山口まちづくりセンターは、山口の住まい・まちづくりに関わる多様な視点・切り口から調査研究、情報発信を行い、まちづくりに関するコーディネートを行っています。活発な部会活動の一端をご紹介します。

<やさしいまち研究部会>

人にやさしいまちづくりを目指し、景観や設備という視点からチェックしています。また、各種関係者との交流や勉強会を重ねています。

<一千年の西の京部会>

まちが形成されてからの500年で蓄積されている山口の資源を、未来の500年にも伝える取組として、空き家となった町家の活用を検討しています。

<町中住まい研究会>

歴史や文化が蓄積されているまちなかに住むために、定期借家制度を活用した住宅供給に関する調査研究を行っています。実際にリフォームや家賃の算出を行い、モデル事業を実施しています。

<ハウジングアドバイス部会>

山口らしい住まいづくりに向けた情報発信を行ったり、材料や伝統工法に関する調査研究を行っています。

まちをあげての大イベント、「アートふる山口」

毎年秋には、一の坂川界わいで、まちの魅力を発信するイベント「アートふる山口」が開催されます。これは、区域内の一般民家やお店を美術館にみたくて手作りの展示会場とし、地域の人々とふれあいながら、山口のまちなみを楽しんでもらうために、まちの情報発信を行うイベントです。これに、山口まちづくりセンターは事務局として参加しています。「ゆっくりと楽しみながらまちを歩くことで、住民にとっては山口の魅力の再発見、来訪者にとっては暮らしの息吹が感じられる観光として、好評を得ています。昨年度は、約3万人が参加されました」と副センター長の内山秋久さん。

毎回趣向を凝らし、常に新しい発見があるように工夫しているそうです。また、この取組を契機に結婚した若いカップルも生まれたそうで、様々な出会い、交流、発信を楽しみながら取り組まれています。今年10月5、6日に第7回が開催されます。



「アートふる山口」がとりもったカップル

まちづくりを支援するNPOとして

現在、山口市からの依頼を受けて様々な調査事業も実施し、NPOとして行政の施策と市民の生活を結びつける役割を果たしていますが、成熟した活動を展開している故の課題も抱えているそうです。「行政との連携で、山口らしい住まい・まちづくりの調査研究やその発信をしていますが、調査研究に関する受託では、実際に悩みを抱えている人に直接手をさしのべたり、次のステップに進むことができません」。

住まい・まちづくりに向けたトータルなサポートをするためには、活動の原資が必要ですが、「NPOとして活動資金や人件費等の必要性の理解がなかなか得られません。活動を継続し、取組を充実させるためにも、活動資金や事務局体制に関して市民の方に理解してもらうことが必要だと思います。今後は、より魅力的な山口の住まい・まちづくりに向けて、市民との直接の関わりを一層深めていきたいと思っています。また、私たちの取組の理解を深めてもらうと共に、市内で様々な取り組みの他の市民活動グループやNPOとの協働関係の強化を進めたいと思います」と内山さん。



「アートふる山口」ではまちの小さな美術館が至る所に生まれます

豊かな自然環境や歴史、それを体現する住まい・まちづくりを次代に継承する取組は、地域の暮らしと密接に関わる第三者的なNPO等が、パートナーシップのまちづくりの接点として機能することで、より機動的で魅力ある取組が展開できることを教えていただきました。

連絡先

特定非営利活動法人
山口まちづくりセンター
clayon@c-able.ne.jp

京町家の保全・再生の事例

～脈々と息づく～

よねだ 米田邸(上京区)



西陣、陰陽師安部晴明がまつられる晴明神社の近くに、米田邸がある。間口5間、黒しつきの壁に格子と木枠の窓が映える。築90年以上、4代目大工棟梁の曾祖父が建てたこの京町家に、7代目米田安志さんの息子、雄介さん夫妻が暮らす。3軒隣の本宅に、安志さん、6代目政司さん、同じ町内には雄介さんの弟も暮らしている。親子3代で大工仕事を手がけ、先祖が仕事で建てた家を直すこともある。

京町家の入り口が南北の通りに面する場合、通常は南側に通り庭がある。米田邸は北側に通り庭をもつ。当初、ピロードを扱う「工場」と「店」、そして「住まい」として建てられた。それぞれ棟が分かれ、「住まい」の通り庭を挟んで北側を「店」、通り庭の奥に「工場」が配されていた。通り庭はそれらをつなぐ通路の役割を果たしていたという。幅が広く、車が入れるよう以前の改修で引き戸が大きく前後に開閉できるように工夫されていた。この仕事も先祖が手がけた。

所有者が変わる。「住まい」と「工場」を残して「店」の棟は売られ、2軒の住宅に建て替えられた。しばらくして「工場」もその役割を終え、「住まい」には高齢の女性がひとり暮らしていた。他にも同じ町内に京町家を持つ「主」だった。3年程前、「主」は息子と同居することになり、「住まい」は誰もいなくなった。「主」が別に所有していた京町家が建売業者の手に渡る。すぐさま新しい住宅に建て替わった。米田さんはそのことを忍び難く感じる。ついに、「住まい」も手放すことになり、業者と話していると聞いた。うちで何とかしよう、と思った。「主」も、米田さんならそのまま残してくれると喜んだ。一昨年の話だった。

奥の「工場」は材料置き場と作業場にした。「住まい」



押し入れに設けた1階のキッチン

は間口が広く、奥の2階続きの和室から庭がよく眺

められた。「ここはみんなで集まれる場所にしたい」と、真っ先に押し入れを改修して水まわりを設け、お茶を沸かせるようにした。長男の雄介さんが世帯を持つことになり、2階を新居にすることにした。安志さん、雄介さん親子で工事にかかる。構造はしっかりしたものだった。普段の仕事の合間を縫って、ぼちぼちと手がけていった。

こうして、米田さん親子の手によって、先祖が手がけた京町家が再び息を吹き返した。2階は息子夫妻専用となり、貴重な材料が使われている広間の座敷はそのままに、一部畳をフローリングに換えた。台所の天井の上部



天井収納を設けた2階のキッチン

は収納スペースとし、屋根裏換気と点検口を設けている。家族が増えたときのことも考えている。12畳ある広間の座敷の中央に鴨居を新設し、間仕切りができるようにした。座敷の奥の縁側からは、実のなる木の茂る庭が望める。表の木枠窓の内側にアルミサッシの窓を入れた。エアコンの室外機を外から見えないよう工夫した。電気配線では線の色ひとつにも気を配る。一つ一つ、配慮を重ね、京町家本来の持ち味と住み心地とのバランスを考えている。

今年の5月から、雄介さん夫妻は2階で暮らし始めた。1階はみんなのスペース。いろんな人が訪れ、集う。町内の会合場所になる。地域のスポーツチームの寄り合いも。常に人が出入りする家で育った雄介さんにとっては、ごく当たり前のことだという。それまではマンション住まいだった奥さんも、戸惑いながらも少しずつなじんでいく。

9月23日は晴明神社の例祭。鼓笛隊の指導をする安志さんは、このところ毎晩練習で忙しい。安志さんも雄介さんもずっとこのまちで生きてきた。この家にも、このまちにも、自分たちの暮らしが息づいている。これからも当たり前前に暮らしていきたい。そのために自分たちで守り続けているのだということを教えられた。

景観・まちづくりシンポジウム 「まちづくりと京町家保存の理論 - 都市計画からみたアプローチ -」を開催しました

京都市の都心部には、歴史的な建造物や史跡が数多く現存しており、その中でも「京町家」は貴重なまちなみ資源の一つとなっています。しかしながら、この地域は大都市の中心部に位置しているため、マンション建設をはじめとする都市開発の進行の中で、この貴重な資源が失われていくという危機に直面しています。こうした状況を受け、京都市において「京都市都心部におけるまちなみ保全・再生に係る審議会」(以下、「審議会」と略す)が設置され、都心部の地域のまちなみ資源との調和を重視する再生方策が提言されました。この提言の実現化に向け、都市計画的な立場から評価・支援するとともに、具体的な方策を探り、広く市民に対して啓発・普及していくことを目的として、都市計画学会関西支部との共催でシンポジウムを行いました。



まちづくりと京町家保存の理論の展開

審議会の委員を務められた各先生方の講演では、座長の青山先生から、「経済的にみると、マンションに開発利益がある限り、京町家はマンションに変わってしまう。この開発利益が過大にならないよう、開発行為に税金を掛けることや高さを制限して土地の価値を下げることで、京町家の防災面の仕組みを技術的に保障すること等が必要だ」と京町家とマンションをとりまく問題について、経済的

な視点を交えての報告がありました。続いて、「現状からどういうまちなみを創造していくかという施策を考えなければいけない。その一つとして、まちなみ税という法定外目的税を設けることを提案する(リム先生)」「京町家には、正当に評価がされていない経済的価値がある。町家再生店舗によって、京都の都心の商業、サービス業が活性化される経済効果は大きい」(宗田先生)「『利害の調整』から『価値の共有』へ転換していくことが必要だ。地域住民と事業者が常に対立的な構造をとるのではなく、事業者と住民と行政がパートナーシップで進められるようにすることが必要。行政の役割は、そういう協議が成り立つ条件をつくることだ」(e 田先生)「どういう方向を目指すかということを決めるには時間がかかる。一度、ダウンゾーニングして議論する時間をとってはどうか」(小浦先生)といった、提言を実現化するための方策等が提案されました。

提言の実現化に向けて

パネルディスカッションでは、京都市都市計画局の岡本理事から「提言では、当面やっていくべき課題と、



継続して取り組んでいく課題がまとめられている。その具体化に向けては、まず住んでいる方の理解が必要だ」と話されました。また、青山先生やリム先生から「日本の京都、世界の京都といわれる京都に対し、国家プロジェクトと位置付けて国からの助成、支援体制を得ることも必要である」という視点が語られ、リム先生からは、京都の歴史的な景観を国家施策として守れないかということについて国会議員を対象に実施したアンケートの紹介がありました。

また、「全国的な『都市再生』は規制緩和に向けて進んでいるが、京都では規制強化に向かっている。『都市再生』とは個性豊かな地域再生を目指すことであり、京都ではまちなみ資源(京町家)等を生かした都市再生を行っていく」ことが確認されました。会場を交えた意見交換も行われ、今後、さらに市民の方々のご理解、ご協力を得ながら提言の実現化に向けて取り組んでいくことが確認されました。

ダウンゾーニング
建物全体の容積率を制限するなどを通じて、土地の利用方法を管理すること。

プログラム

- 日時：平成14年6月26日(水)午後6時～午後8時20分
場所：元京都市立龍池小学校2階講堂
- (1)都市計画からみた「京町家とマンション」
青山吉隆氏(京都大学大学院教授/都市計画学会関西支部長/京都市まちなみ審議会座長)
 - (2)まちづくりと京町家保存の理論と実践
京町家保存の経済的手法
リムボン氏(立命館大学教授/京都市まちなみ審議会委員)
京町家の再生 京のまちなみ資源の再評価と活用手法
宗田好史氏(京都府立大学助教授/京都市まちなみ審議会委員)
パートナーシップのまちづくり
q 田光雄氏(京都大学大学院助教授/京都市まちなみ審議会副座長)
町家の空間構造と街並み形成
小浦久子氏(大阪大学大学院助教授/都市計画学会関西支部企画事業副委員長/京都市まちなみ審議会委員)
 - (3)パネルディスカッション
コーディネーター：青山吉隆氏
パネラー：リムボン・宗田好史氏・q 田光雄氏・小浦久子氏・岡本 晋氏(京都市都市計画局理事)
コメンテーター：増田 昇氏(大阪府立大学教授/都市計画学会関西支部企画事業委員長)
中川 大氏(京都大学大学院助教授/都市計画学会関西支部企画事業副委員長)

『なるほど「京町家の改修」 ～住みつづけるために～』を発行します！

センターでは、平成13年9月から「京町家なんでも相談」を実施し、京町家をお持ちの方やお住まいの方の様々な悩みや不安の解消に向けて取り組んでいます(ニュースレター16、17、19号参照)。「京町家なんでも相談」の実施以来、センターに寄せられる様々な相談の中でも、京町家をお持ちの方やお住まいの方から数多く聞かれるのが、京町家の改修に関わる様々な不安や悩みです。

そこでこの度センターでは、それぞれの京町家を維持・継承していく上で欠かすことのできない京町家の改修工事について、わかりやすく理解していただき、活用していただける『なるほど「京町家の改修」～住みつづけるために～』を発行します。

京町家の特徴やつくりなど、京町家に関する基礎的な知識をはじめ、実際の改修工事の流れ、工事を頼む上で知っておきたいこと、税金に関する基礎的なことや、実際に改修された事例なども掲載していますので、京町家を維持・

継承していく上で、多くの方に共通しているお悩みの点で参考にしていただけるのではと考えています。

『なるほど「京町家の改修」 ～住みつづけるために～』内容

- 京町家について
 - 京町家を直したい
 - 京町家で快適に暮らしたい
 - 改修工事について
 - 税金について
 - 相談・情報
 - 改修の事例
- A4版144ページ/全ページカラー印刷
販売予定

14年度予算・13年度決算の概要

センターの平成14年度事業計画及び収支予算並びに平成13年度決算の概要を報告します。

<平成14年度事業計画>(は自主事業、は受託事業)

地域まちづくり	地域まちづくりセミナー
活動の促進	まちづくり活動支援 住民参加型まちづくりデータベース作成支援 京都まちづくり交流博覧会事業 京都市職員研修受託
地域と共生する	京町家ネットワーク
土地利用の促進	地域共生の土地利用ネットワーク
情報発信	景観・まちづくりシンポジウム
・相談等	ニュースレター「京まち工房」 ホームページ まちづくり相談 京都市景観・まちづくりセンター新施設関連事業

<平成14年度収支予算>(単位:千円)

(収入の部)	
基本財産運用収入	210
会費収入	4,000
事業収入	1,000
補助金等収入	216,894
雑収入	90
前期繰越収支差額	5,000
合計	227,194
(支出の部)	
事業費(自主事業費)	68,660
”(受託事業費)	117,174
管理費	39,360
予備費	2,000
合計	227,194

<平成13年度収支決算>(単位:千円)

(収入の部)	
基本財産運用収入	160
会費収入	3,190(個人138口,団体50口)
事業収入	3,588
補助金等収入	131,102
雑収入	19
前期繰越収支差額	4,329
合計	142,388
(支出の部)	
事業費(自主事業費)	63,837
”(受託事業費)	39,249
管理費	33,124
予備費	0
次期繰越収支差額	6,178
合計	142,388

平成14年度賛助会員

[個人]

青山とうこ	上田 修三	海堀 安喜	木村 寿夫	鈴木 茂雄	中川 慶子	野嶋 久暉	廣田 吉昭	山本 晶敏
芦田 英機	上原 任	片田 住夫	木村 忠紀	園 孝裕	中島 康雄	長谷川梅太郎	藤本 春治	山本 一馬
市川 喜崇	植村 博之	桂 豊	國井 正之	高木 勝英	仲筋 邦夫	長谷川忠夫	平家 直美	山本 一宏
井手 正己	大島 仁	亀井 孝郎	坂本 登	高木 伸人	成田 和嗣	畑中 政治	星川 茂一	山本 耕治
糸井 恒夫	大森 壽人	川口 東嶺	佐治 正雄	竹内一二三	成瀬 英夫	林 建志	正木 敦士	山本 七重
稲石 勝之	阿崎 篤行	川島 三郎	佐竹 和男	田中 治次	西 晴行	林 幹夫	馬屋原 宏	吉田真由美
稲波 良幸	阿崎 和夫	河邊 聡	塩谷 孝雄	田村 佳英	西川 壽麿	播摩 和美	南 寛	淀野 実
稲本 浩一	岡本 晋	上林 研二	島田與三右衛門	寺田 恵子	西u 和夫	春名 秀雄	森澤 正一	
犬伏 真	奥 美里	岸田里佳子	下蘭 俊喜	寺田 敏紀	西島 篤行	人見 米一	森澤寛久造	
伊本 俊男	奥山 脩二	北里 敏明	白須 正	寺田 史子	西嶋 直和	平竹 耕三	山口 豊	
岩本 文夫	小山 遼一	北山 俊二	杉山 義三	永井久美子	西田 隆二	平竹 洋子	山口 勝広	

[団体]

大阪ガス株式会社 近畿園部	要建設株式会社	株式会社京都放送	株式会社ゼロ・コーポレーション	NPO法人マンションセンター京都
大阪ガス株式会社京滋事業本部	関西電力株式会社京都支店	京都リサーチパーク株式会社	株式会社地域計画建築研究所	ローム株式会社
株式会社オーセンティック	京セラ株式会社	NPO法人京滋マンション管理対策協議会	都市居住推進研究会	
株式会社大林組京都営業所	京都駅ビル開発株式会社	株式会社 ジェイアール西日本伊勢丹	西日本電話株式会社京都支店	
オムロン株式会社	株式会社京都科学	清水建設株式会社	花豊造園株式会社	

『まちづくり交流』

かすが きょう 春日 京ふれまちトーク

～地域住民が主体となり開催するまちづくり交流の場～



京都御所と鴨川の間という恵まれた環境に位置する春日学区。これまでから、住民の知恵を生かし、福祉活動、防災活動をはじめ、安全・安心の地域づくりに向けた様々な活動が行われています。その春日学区で、春日住民福祉協議会が、他学区の方や学生、行政職員など様々なまちづくりの主体が交流する場として開催している「春日 京ふれまちトーク」を紹介します。

開催のきっかけ

「どのようにして、活動を次世代に引き継いでいければいいか」ということを考えたことが始まりでした。まちづくりはとても幅が広く、学区外の人・組織との交流で生まれる多彩な活動を通じて、より豊かなまちづくりとなります。こういったことから、他学区の活動内容や多様な考え、また、行政情報などの共有や意見交換を積み上げることが、各々のまちづくりに役立つのではないかと考えました」と春日住民福祉協議会の高瀬会長は、「春日 京ふれまちトーク」に託す思いと開催のきっかけを話されました。

幅広いテーマで開催

「春日 京ふれまちトーク」は、まちづくりのリーダーや次世代のまちづくりの担い手を対象に、約2カ月に1度開催し、他学区の方、学生、行政職員など、毎回、20名から40名の方が参加しています。

色々な分野から招いた方や参加者自らが話題提供者となり、これまでの経験や活動から得た思いを題材に、ハード、ソフトの両面から幅広くまちづくりについて考え、幅広い情報、意見の交流や、人と人との交流を行っています。今回のテーマや話題提供者も「春日 京ふれまちトーク」の中で決定し、開催していますが、これまで右表のようなテーマで14回開催し、活発な意見交換が行われてきました。



開催日	テーマ
平成12年 3月 3日	参加者交流会
平成12年 4月14日	東山区「福祉・防災マップづくり」を取り組んで
平成12年 6月 2日	京都がめざす景観まちづくり
平成12年 8月 3日	防災と地域活動
平成12年10月25日	防犯のまちづくりと交番の役割について
平成12年12月 6日	福祉のまちづくり活動 - 新システムへの転換を！ -
平成13年 2月 4日	21世紀の若者が考える自治・福祉・防災のまちづくり(老人問題シンポジウム)
平成13年 7月 8日	京都市がめざす行政改革について
平成13年 9月19日	「これからの自治活動」を考える
平成13年11月16日	「市民防災行動計画」について
平成14年 1月28日	新しい市民参加のしくみづくり
平成14年 3月18日	有隣学区の自治連合会の組織と財政課題 - 町内会加入のあり方とマンション -
平成14年 5月13日	姉小路界わいのまちづくり活動について・マンション対策
平成14年 7月 8日	夢が広がる地域の学校

次世代へ

「決して、どこかのまちづくりをそっくりもってくればいいというわけではありません。地域によって仕組みも異なれば、特色も異なります。様々な情報を活用し、独自のまちづくりを進めてもらえればと思います」と、高瀬会長。こういった活動が互いを刺激し合い、それぞれのまちづくりの促進につながるとともに、この活動により芽生えたネットワークが、元学区を点と考えると、他の学区や組織とつながることにより線になり、そして、その線が絡み合っって面へと広がっていくのではないのでしょうか。そのことが、これまでのまちづくりの取組や思いを次世代へと引き継ぐことにつながるものと期待されます。

春日住民福祉協議会
「お隣り同士のふれあいを大切に」をモットーに、在宅福祉活動を中心に継続的なまちづくり活動に取り組む。内閣総理大臣賞をはじめ、数々の賞を受賞。ニュースレター第2号でも紹介。

京のまちの今昔物語

撮影場所：北大路橋を東側から撮影
(協力者：大菅 直さん、白木 正俊さん)

賀茂川にかかる北大路橋。西側には加茂街道が通っています。昭和9年ごろの写真では、橋の上を走る市電や着物姿の女性などが確認できます。この橋は昭和8年に建設されました。約70年経った現在も、ほぼ当時と同じ姿で、人々の行き交う橋となっています。



昭和9年ごろ 現在
「京のまちの今昔物語」では、昔の写真から、現在の京都について考えることができるとしています。皆さんのお宅のアルバムに、かつての京都をしのぶ古い写真がありましたら、是非お貸しください。

まちづくり提案

e西陣～にしじん どっとこむ

今回は、インターネットのホームページで地域密着型の生活情報サービスを行い、西陣に住む人々の新しいコミュニケーションのかたちを提案する「e西陣～にしじん どっとこむ」を紹介します。



西陣の生活をもっと楽しく、便利に

「e西陣～にしじん どっとこむ」では、インターネットを利用して西陣地域の買い物情報、イベントガイド、行政情報など身近な生活情報を得ることができます。「インターネットは情報を得る手だてとして、とても便利なものです。しかし、地域の身近な生活情報を探そうとすると、意外に情報が少ないことに気がつきます。京都を紹介するホームページはたくさんありますが、観光案内的なものや、京都市内全域をカバーするものでは『ふだんの日常生活の道具』としてはちょっと使いにくいのです。そこで暮らしている人が利用できる、生活に根ざした情報こそ必要と感じました」と、事務局代表の鏡 敏彦さん。

鏡さんは西陣でイベントの企画・制作を行う会社を営まれていて、地域の商店街が主催する夏祭りのお仕事などもされています。生活を通して、西陣のまちや人に魅力を感じたこともe西陣の活動のきっかけとなったそうです。「西陣のまちを歩いてみれば、そのおもしろさ分かるし、できればお店に入って、まちの人と話してほしい。若い世代が地域の商店街で買い物をしたり、お店の人と交流したりするきっかけになれば」と話されます。

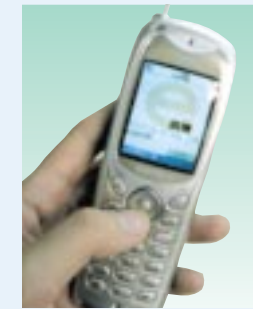
参加する人たちで育てていくホームページ

e西陣のホームページではお薦めのお店の紹介やまちのレポートなど、様々な情報を募集しています。現在は寄せられた情報を元に、事務局スタッフが1軒づつお店等を訪ね、e西陣への登録を依頼しています。このような活動はボランティアとして行っているそうです。「一つのお店に行くと、『あそこのお店もいいよ』などと紹介されることも多く、たくさんの人を知りました。何時間か話し込んでしまうことも多くあります。このような人との出会いに活動のおもしろさややりがいを感じます」と鏡さん。今後はぜひ、西陣にお住まいの方々にライターやライターとしても参加してほしいそうです。「地域の人々がホームページ作りに参加することで、雑誌や新聞で伝えきれないナマの情報や口コミ情報、生活の知恵といったものもどんどん反映されていきます。西陣に生活されていたり、お仕事をされていたりする、いわば、まちの人たちで“育てる”ホームページでありたいと考えています」。

携帯電話を利用した情報発信

この5月からは携帯電話での情報発信も始めました。携帯電話の画面に表示されたクーポンを見せるとお店で割引などの特典が受けられるサービスも開始され、反響を呼んでいます。このクーポン制度は現在30数軒のお店等で利用できます。

「利用した人よりも、お店の人の反響が大きく、『クーポンを見て来た人がいた!』と、よろこんでもらっています。近い将来には、携帯電話など手軽な道具を使って、お店の人がその場で簡単に『今日の特売品』などを情報発信したり、西陣を散歩している人が『こんなスポットを見つけた』と投稿してくれたり、そんなふうになれば、更におもしろくなるんじゃないでしょうか」



e西陣の情報を持ち歩くことができると鏡さん。

地域コミュニティがインターネットでつながる日

最後に、今後の展望についてお話を伺いました。「e西陣のような小さな地域コミュニティのホームページが各地にでき、それぞれが繋がれば、更に便利になるし、色々な情報交流ができると思います。そこから、インターネット上での情報だけでなく、次第にものや人が交流するようになれば」と鏡さんの夢は広がります。「実のところ、インターネットもe西陣も、道具にしかならないと思っています。道具としてたくさんの方が使ってくれて、そこから何かコミュニケーションが生まれれば、それがこの活動の中でいちばん大切に思っていることです」。

まちづくりは人と人のコミュニケーションから始まる、そのことを再認識するとともに、地域コミュニティの一つの新しい形を見た思いがしました。今後の活動がさらに楽しみです。

- * * *
- e西陣～にしじん どっとこむ <http://www.nishijin.ne.jp/>
- iモード版 <http://www.nishijin.ne.jp/i/>
- J-フォン版 <http://www.nishijin.ne.jp/j/>
- EZweb版 <http://www.nishijin.ne.jp/ez/>

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。



日本サスティナブル・コミュニティ・センター (SCCJ)

事務局長 浅野 令子さん

京都のまちなかに事務所を構え、誰もがインターネットを活用できる社会を目指す、NPO法人「日本サスティナブル・コミュニティ・センター(SCCJ)」の事務局長、浅野令子さんにお話を伺いました。

「ウチコミくん」というソフトを開発されたそうですが?

視覚障害のある人のための、パソコンのキーボード練習ソフトです。きっかけは3年ほど前から開催している「視覚障害者のためのインターネット講座」です。これはインターネットやメールが使えるようになるのを目的とする全部で15回の講座なのですが、そのうち半分ぐらいをキーボードの練習に使わざるを得ませんでした。視覚障害がない人の場合は初心者でもコンピューターを手探りで使い始めることができますが、視覚障害のある人の場合は、まずキーボードの位置を空間的に把握することが必要になるからです。そこで音声によるキーボード練習ソフト「ウチコミくん」を開発しました。

開発はどのように?

京都工芸繊維大学の西本卓也先生の協力により、視覚障害のある人にもモニターとしてたくさん参加していただいて開発しました。そのおかげで、非常に役に立つソフトとなり、

情報教育の推進を目的とするエデュテイメント・フォーラム2001の中で最優秀賞を受賞しました。この7月には、聴覚を通して体に直接訴えかける3次元音声を使った「ウチコミくん3D」も開発しました。

SCCJではどのような活動をしていますか?

高齢であったり障害があるために、インターネットが使えないので情報が欲しくても得られないという状況を少しでも減らすことを目的として、様々な活動をしています。例えば先ほどの「ウチコミくん」のように個人が技術を習得する手伝いや、インターネット上で表現される内容を、高齢者や障害のある人にとっても受け取りやすくする取組です。

全国の高齢者・障害のある人をあわせると3,000万人近くにもなり、新しい産業として発展する可能性があります。高齢者・障害のある人がそれぞれの潜在能力を発揮し、インターネットに「娯楽」としてだけでなく「仕事」として関わることができるようなお手伝いをしていきたいと思えます。

今目指していることは?

視覚障害のある人がホームページを閲覧する時は、音声で読み上げるソフトを使用しますが、一見するとデザインが美しいページでも読みにくいものや読み上げるだけではわかりづらい場合があります。そこでホームページが視覚障害のある人にとって理解しやすいか判断する「目利き士」を視覚障害のある人自身にやってもらうことを考えています。

また、通信にかかる費用が高いことも高齢者や障害のある人がインターネットを使用した仕事をする場合のハードルとなります。そこでインターネットに接続できる環境をもっと自由に手軽にするために、京都のまちなかに無線インターネッ

ト網を張りめぐらす「みあこネット」プロジェクトも進めています。今は実験の位置付けですが、都心部を中心に150カ所のアクセスポイントを設置し徐々に使用できるエリアが広がっています。通信料の低下により可能になることとして、例えばアクセス・ホットラインを考えています。今まで視覚障害のある人が街を歩く時は介助の人が案内をすることが多かったのですが、これだと視覚障害のある人同士のカップルが2人きりのデートができなかったり、銀行の通帳や印鑑、暗証番号の管理に問題がありました。カメラのついた小さな情報端末を使い、状況を送信することによって、道路や建物内の歩行の支援や、本人の代わりにATM等の文字を読み上げる支援などが考えられます。

地域とNPOとの連携については?

事務所を構えているのは本能学区なのですが、「みあこネット」の活動は口コミを通じて地域の方々に協力していただきまして、室町通界隈では「みあこネット」の使用できる範囲は充実しています。NPOは地域の組織とは性格が異なると思いますが、福祉・環境など様々な切り口があり、NPOと地域と一緒に手を組んで活動することで地域の活性化につながる可能性があると思っています。私達はインターネットを活用して元気な社会を作りたい、そんな思いで普通の町家をお借りして活動しています。



特定非営利活動法人
日本サスティナブル・コミュニティ・センター (SCCJ)
<http://sccj.com/>

私と京都



京つけもの西利
代表取締役社長
平井 義久

もう一度行ってみたいと思われるまち「京都」に

写真が趣味の私は、日本の各地やいろいろな世界の都市や田舎を問わず、時には秘境まで、シャッターチャンス求めて旅をします。公的な出張や私的な観光にもカメラを必ず持参し時間を見つけては、瞬間の衝動のおもむくままに撮り続けています。風景はもちろんですが、その土地の人々の生活の中に、笑顔を引き出したり、その土地の匂いを感じられるような写真を撮りたいと願っています。そこに暮らす人々の生き様を

通して、その土地の風土を感じとり、心の中に、フィルムの中に焼き付けようとしています。広大な風景の中にたとえ小さくても人影が写っていれば画面の中にその土地ならではのドラマが生まれそうな気がするからです。

人々の笑顔に触れるためにファインダーの向こう側の人々に語りかけます。会話の中でほとんどの人が「どこからきたのか?」と問いかけられます。「京都からです」と答えますと多くの人は「京都ですか。すばらしいところですね。是非一度行ってみたいと思っています」といいます。京都へ一度も訪れたことが無いのに、その人の「京都」が出来上がっているようです。

北海道に紅葉を撮りに行ったときに大いに不思議がられました。「何故こんな遠いところまで、わざわざ紅葉を撮りに来るのですか。京都のまちなにはもっと美しい紅葉があるのに。」そして東山、清水、東福寺、嵯峨野、嵐山、高雄とおなじみの地名を口にされます。お寺の庭に、竹やぶの小道に、街の路地に土塀にと…。景観を通じて観光京都のブランドイメージを好意的に持ってくれている。ありがたいことです。感激の極

みであります。このような場面に出会えば会うほど我がまち京都をすばらしい都市にしなければならぬと、気持ちが高ぶります。

京都には、社寺、仏閣、歴史に名高い数々の器や景観と、京都の風土、気風が残っています。住まう私達にとっては、身体や心にあった心地よいまちなのかも知れません。しかし、このまちを訪れていただいた方々に、もう一度来てみたいと言う満足感をあたえているかどうかは疑問が残ります。交通渋滞にうんざりされたり、うべだけの観光ルートに疲れ果てたり、排他的な一面に出合ったり……。

変わりゆくもの、守りぬくもの、変わらねばならないもの。それぞれに今の京都に大切な要素です。ハード面の整備促進と温かい京都の人たちのおもてなしの心を、素直に表すことが出来れば、京都の魅力はもっと増すでしょう。

千年を超えた歴史の都、日本の心のふるさとと言われる京都に憧れを抱いて来られた方々に、私がかつて、各地でファインダーの向こう側からもらった多くの笑顔のお返しが出来ればと思っています。

もう一度 おこしやす。京都へ

《センター解説アワー》

「京都のまちづくり史」とこれからのまちづくり

都市は、政治、経済、地理、産業をはじめ様々な要因によって形成され、その要因に根ざした都市固有の魅力を持っています。

1200年もの間、都市であり続けたまち・京都も、各時代の政治、社会経済、住民の知恵で随時、姿を変えてきました。つまり、住民の知恵と創意工夫が重ねられて、現在の姿があるといえます。特に明治以降は、人口増大や昭和初期の市域拡大、高度成長期の土地活用、車社会の進展と産業構造の変革等を受けて、まちの構成や土地利用は大きく変化してきました。

一方、京都の地域にはそれぞれ固有の歴史があり、その特徴が大きく異なっています。これは平安京以来、歴史的に蓄積されてきた地域コミュニティや社会規範、祭、商慣行、産業等によって連綿と受け継がれており、そこに「まちづくりの遺伝子」があると想定されます。また、京都では「町式目」に象徴されるように、住民が自分たちの地域を管理、運営してき

た事実もあり、今後成熟社会に向かう中で、歴史をひもといて先人のまちづくりの精神に学ぶことも求められてくると思われます。

「まちづくりの遺伝子」は、個性的なまちづくりを進めていく上で重要な情報であると考えられます。これらを読み解き、個性的な京都のまちづくりの推進を図るため、センターでは京都市からの受託事業として「京都のまちづくり史調査研究委員会」を設置し、「京都のまちづくり史」の整理作業、調査研究を重ねています。この研究成果は、これからのまちづくりに欠かせない情報になると確信しています。

「京都のまちづくり史調査研究委員会」

監修：高橋 康夫(京都大学 教授)

「京都の礎」部会

座長 日向 進(京都工芸繊維大学 教授)

「近・現代部会京都」部会

座長 中川 理(京都工芸繊維大学 助教授)